

[実践報告]

## 既存の仏教施設を利用しての場づくり： 「真宗本廟子ども奉仕団」を通しての考察

羽賀 文佳(真宗大谷派僧侶/滋賀県長浜市中学校美術講師)

### 抄録

真宗大谷派における児童教化のひとつ「真宗本廟子ども奉仕団」の在り方を紐解くことで、地域における仏教施設の持つ社会資本を再考する。

「真宗本廟子ども奉仕団」では、浄土真宗が大切にしている「門徒としての生活」が中心に据えられつつ、子ども達と共に楽しむ工夫が随所に考えられている。東本願寺という巨大な建物、敷地をフル活用してレクリエーションや劇を考えたりするこの活動は、とてもクリエイティビティに満ちている。

この活動を実践報告として紹介することで、ただの歴史的な建物として寺院を見るのではなく、今も人が行き交う交流の場であることを周知するとともに、上記の活動に興味を持つ人をスタッフとして迎え入れる窓口になればと思う。

### Key word

仏教、子ども、場づくり、サードプレイス、演劇

## 1.はじめに

本稿は、2018年7月に真宗大谷派・東本願寺の同朋会館という施設を中心に開催された「真宗本廟子ども奉仕団」の実践活動の報告ならびに実践研究である。

### 1-1. 実践の社会的背景

仏教を母体とする既存の施設が、現代における第三の場所「サードプレイス」として存続することの可能性を模索した実践報告である。文化庁が行う「宗教統計調査」において平成29年度の日本全国における寺院の数は77,254寺院。これだけの数が存在するにも関わらず、宗教離れが叫ばれるようになって久しい。[上田 1995] 少子高齢化や地方の衰退など様々な理由が挙げられるが、多くの人が「お寺は死んだときにだけお世話になるもの」と感じているのではないだろうか。本来仏教とは「自分の生をどのように生きていくか」を問う宗教である。[池田 2007]

本来寺の持っていた社会資本をもう一度取り戻すためには、居場所を求める人に開かれた場所であることが必要である。真宗大谷派では教化事業の一環として様々な形で教化活動を行っている。その中で青少年を対象にした「真宗本廟子ども奉仕団」(以下子ども奉仕団)は約30年続いている教化活動の一つである。数ある教化活動の中でなぜ「子ども奉仕団」を取り上げるのか。筆者は2017年の京都の東本願寺で毎年夏に行われる青少幼年教化事業である「子ども奉仕団」と

「同朋ジュニア大会」にスタッフとして参加した。その時に出会った参加者小学生A君との出会いがきっかけである。

「子ども奉仕団」ではA君は私の持った班には所属していなかったのだが、傍から見ていても、彼の行動は明らかに逸脱していた。これが「学校」という場所ならば、即座に問題視され対策を立てるだろう。しかしそうではなかった。彼を放っておくのではなく、その班の班担または進行や研修部のスタッフが、常に彼のそばにいた。彼がどんなに乱暴な行為をしても、誰かしら必ず彼のそばにいた。A君は「子ども奉仕団」ののちに開催された「同朋ジュニア大会」にも個人参加していた。やはりそこでも同じような逸脱行動が見られた。しかし、「子ども奉仕団」の時と異なることが2つある。

一つ目は著者のほかにもう一人どちらの集いにもスタッフとして関わっていた男性Fさんの存在である。「子ども奉仕団」最終日、Fさんは班を超えて多くの子どもたちと関わりを持っていた。A君ももちろん彼と最後までよく遊んでいた。ほとんど知り合いのいない中に、自分の事を少しでも知る人間が一人でもいると心強く思えるのは大人も子どもも変わらない。A君はFさんをとおして自分の場所を見つけていたのだろう。

二つ目は彼と同じような逸脱行動をする、小学生B君の存在である。A君との方向性は異なるものの、その行動が逸脱していることには変わらない。ここでもやはり、そんな彼らのそばには複数の大人の寄り添う姿があった。

これらの事象からわかるのは、学校や家庭で求められる「理想像」を、これら二つの場所は強いることがない。その姿勢が、家でも学校でもない第三の場所「サードプレイス」としての場が生成されたという事実である。「居場所を求める人に開かれた場所」の実践として仏教施設がどのような働きが可能なのか。今回の実践報告では「子ども奉仕団」に焦点をあてて考察していきたい。

## 1-2. 本稿の構成

本稿の構成は以下の通りである。第2章では、真宗本廟子ども奉仕団の母体である真宗大谷派についてと、造形ワークショップに関する先行研究について述べる。第3章では「真宗本廟子ども奉仕団」の歴史と当日までを概観する。第4章では「場」についての考察を行い、第5章は、今後の構想について述べたい。なお、本稿では、真宗本廟子ども奉仕団を「子ども奉仕団」、真宗本廟子ども奉仕団に参加する大人を「スタッフ」と表記する。

## 2. 学術的背景

### 2-1. 真宗大谷派について

親鸞の開いた、阿弥陀仏の浄土に生れて悟りを開くことを目的とする仏教の一派。真宗とも称し、俗に一向宗、門徒宗などとも呼ばれる。浄土宗と同じく、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の浄土三部経を根本経典とし、そのうち『無量寿経』をおもなものとする。親鸞の主著『教行信証』が後世、立教開宗の根本聖典とされた。親鸞は法然の弟子で、悪人正機などの説とともに、徹底した他力による往生を主張し、信心を特に強調した。親鸞の没後、墓所が東山大谷に移され、これが本願寺のもととなった。また特に第8世蓮如が福井県をはじめ北陸地方に布教し、きわめて盛んとなったが、徳川家康の保護を受けた教如が京都東六条に別の本願寺を建てるに及んで

東西の本願寺が分立した。(ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典より)

ただ阿弥陀如来の働きにまかせて、全ての人は往生することが出来るとする教えから、多くの宗教儀式や習俗にとらわれず、報恩謝徳の念仏と聞法を大事にする。合理性を重んじ、作法や教えも簡潔であったことから、近世には庶民に広く受け入れられた。

このような歴史的背景から、真宗大谷派とは限りなく民衆に近い仏教といえる。

## 2-2. 医療検診の場での造形ワークショップに関する先行研究

東日本大震災を契機とした関西圏への避難移住者を対象にした市民団体「こども検診医療基金・関西」<sup>1)</sup>(以下基金)は真宗大谷派(東本願寺)の僧侶・山内氏が代表を務める市民団体である。「大人も子どもも健康相談」と銘打って、2カ月に一度のペースで専門の技師や医師による健康相談会を行っている。会場は真宗大谷派「しんらん交流館」(京都市下京区)。そこで造形ワークショップ行うようになり6年が経過した。これまで行ってきた「医療検診の場での造形ワークショップ」では、創作活動で使用する素材に対しての考察、実際の現場でのモノや人の流れの把握、何より複雑な背景を背負った人々に対しての第三の場所に貢献できたように感じる。事実、基金の「ほっこり相談会」はサードプレイスの8つの条件をほとんど満たしていた。

1. 飲食無料(無料あるいは安い)(食事や飲料の提供)。
2. 京都駅から歩いて10~15分(アクセスしやすい、歩いて行ける)。
3. 2、3か月に一回の相談会が実施されている(習慣的に集まっている)。
4. フラットな関係性を大切にした造形ワークショップ  
(フレンドリーで居心地がいい)。
5. 最低でも年1回の検診を行い、希望者も随時受けてつけている  
(古い人も新しい友人も見つかる)。[Oldenburg 1989]

しかし、ワークショップ参加者もピークの2014年~2015年以降は半分ほどになった。相談会は2か月に1度のペースで行われる。あくまでもほっこり相談会は、健康相談会という検診を目的とした相談会である。年に2回の検診を推奨しているとはいえ、年6回の相談会の全てに参加する人は決して多くない。そういった意味では、基金でのワークショップはある程度修正する時を迎えている。[羽賀 2017]

## 2-3. 真宗大谷派の施設を用いた公共事業について

「しんらん交流館」<sup>2)</sup>は「ほっこり相談会」だけでなく、様々な活動を行っている。施設には500人収容の大谷ホール、様々な企画展を行う交流ギャラリー、簡単な図書室である東本願寺文庫(閲覧室)、その隣には絵本コーナーが設置されており、登録すれば誰でも本を借りることができる。絵本コーナーでは「東本願寺文庫幼児広場」として月に一度、絵本の読み聞かせや手遊びなどを行っている。「NPO法人寺子屋プロジェクト」と協働し、大人と子どもが学び合う現代の寺子屋「テラスクール」も開設されている。

建築物がただの人を入れるハコではなく、それを使う人間によって機能が変化すること[上野 2002]は真宗も例外ではない。「しんらん交流館」は、地域の人々にとって交流の場所として活用されている。それは、本来寺院が持っていた姿ではないだろうか。

だが「しんらん交流館」は真宗大谷派の持つ施設の中でもかなり新しい建築に属する。今回実践報告で取り上げる「子ども奉仕団」が行われるメイン会場は「同朋会館」。真宗門徒の宿泊施設である同朋会館についてはその意味と共に次節で取り上げる。

### 3. 真宗本廟子ども奉仕団

真宗大谷派・同朋会館における奉仕団とは真宗門徒の基本である「聞法する生活」を実践する道場である。東本願寺<sup>3)</sup>の言葉を引用すると、

1961(昭和36)年の親鸞聖人七百回御遠忌をご縁として、翌1962(昭和37)年「真宗同朋会運動」が始まりました。この運動の中心のひとつが真宗本廟奉仕であり、同朋会館はその真宗本廟奉仕のために全国の同朋が集う場として開かれています。

本廟奉仕は、親鸞聖人がお亡くなりになった後、聖人の教えをうけた門徒がありし日の聖人のご恩に報いるために、御真影(聖人の御木像)を安置し、おりおり集い、聖人が明らかにされた教えにふれ、寄り合い、談合されたことをもとしています。

奉仕団の構成は参加者である門徒、生活の世話役である補導、講師と共に1泊2日から2泊3日の日程で同朋会館にて寝食を共にする。「子ども奉仕団」とは、その対象を子どもに置き換えたものである。

1985(昭和60)年8月に初めて中学生を対象にした「中学生の集い」が開催され、1987(昭和62)年夏に「真宗本廟子ども奉仕団」に名称を改め、研修部での開催されるようになった。対象は小学校4年生～6年生。日程内容も「お勤めの練習」などが盛り込まれるようになり、現行の「子ども奉仕団」が形成された。

「子ども奉仕団」はスタッフによる2泊3日の事前研修を必ず2回行う。1回目は5月に、2回目は6月に。メイン会場は今年の夏に改装を終えたばかりの同朋会館。メンバーは本山研修部職員とスタッフの公募により集まった日本各地の真宗に縁のある人間である。第1回スタッフ事前研修会では、自分の参加する回がそのまま班となる。一つの班につき大人のスタッフは20人(約4名の研修部職員を含む)。2018年は第1回が7月26・27日(1泊2日)、第2回が7月29～31日(2泊3日)、第3回が8月4・5日(1泊2日)の全3回。欠員やサポートスタッフは他の班のスタッフや過去の子どもの奉仕団スタッフ経験者に声をかけ補充する。

各班のメンバー構成は出向可能日とバランスを見て決める。経験者であるか否か、男か女か、門関係者であれば地元での青少幼年教化に携わっているか。そして、5月6月にそれぞれ行われる全2回の事前研修に参加できるかどうか。大学生だけでなく、社会人も多くスタッフとして関わっていた「子ども奉仕団」だが、ここ数年はスタッフの確保が難しくなっている。社会人であれば、休みを取りにくい。大学生も今や学校からの証明発行を求めるところがあるという。社会全体にゆとりがなくなっているともとれる。そんな事情もあり、今年度のスタッフ事前研修会は1回目または2回目のどちらかに参加できるという条件に変更された。

長年のテーマとして掲げているものは「ほとけの子」。その回全体を象徴する趣旨文は各回のスタッフが第1回目の事前研修会に掲げられた趣旨文を受けて再考する。このテーマと趣旨文が仏教施設で子どもたちに向けた取り組みの大きな特徴の一つである。講師を招き、丁寧にテーマと趣旨文に向き合い、まずスタッフが受け止める。そのうえで子どもたちに何を伝えたいかを各回で考えるのが1回目の事前研修である。掲げられたテーマ・趣旨文を通して、自分たちが奉仕団としての生活を子どもとともにを行うことを身体を通して知る。2回目の事前研修はそのことを踏まえてそれぞれの班ごとに考えた趣旨文を深め企画を考え、子ども奉仕団当日の準備を行う。

### 3-1. 第1回スタッフ事前研修

3で前述したように、第1回事前研修会での対象はスタッフである「大人」が奉仕団としての生活を行うことが一番の目的である。「聞法する生活」。それこそが奉仕団としての生活なのだが、具体的にどのような生活を送るのか。朝7時の晨朝(おあさじ)から始まり、講義を受けて、座談を行い、清掃奉仕を行い、夕事勤行を行う。この基本的な流れで2泊3日を過ごす。中心に据えられるのが講師による話を受けての班別座談である。いただいた講話を、それぞれがどのように受け取り、子どもたちに何を伝えていくのかを確かめ合う。

2018年度真宗本廟子ども奉仕団第1回スタッフ事前研修会は2018年5月29日(火)～31日(木)の日程で開催された。

テーマ「ほとけの子」

趣旨文

「私はであう 僕はであう

私と君と 彼と彼女と

あなたは 君はどんな人

であいの中で 確かめ合う

目の前の人 は 自分と合う 合わない

声が聞こえる 聞こえない 聞きたくない

出会いを繰り返す度に 考える

そんな私たちは

認め合えるかな

自分の事さえも認められないのに

『認め合えないよ』

という言葉では片づけたくない

そう思えた時

『あなたもわたしも ほとけの子』という言葉にであった

あの人のこと 私のことを ほうっておけない

そんな呼びかけに聞こえた

もう少しここにしようかな」

講師は東京教区存明寺住職・酒井義一氏。「私にとっての子ども奉仕団」という講題で全3回の講義が行われた。ご自身が青少幼年の教化活動を始められたころのお話から、実際に子ども奉仕団を通して出会った人や出会った言葉などを中心に講義は進んだ。酒井氏がこれまでの活動を通して得られた学び、参加された過去の子ども奉仕団の実例、そしてこれからの子ども奉仕団の在り方などをお話された。

酒井氏による3回の講義を受けての座談、そして生活を通して、各回のスタッフはスタッフ同士の関係性を構築していく。事前研修とは大人による子どものための安全確認や一方的に遊びを提供する会議ではない。事前研修とは「スタッフ=子ども」とした、奉仕団そのものなのである。研修部主任・高山崇氏は「子ども奉仕団は二つの側面を持つ」と語る。

「ひとつは言うまでもなく青少幼年の教化。そしてもう一つがスタッフである大人の教化です。事前研修にある趣旨文を通して、大人こそ問いを持つことが必要です。今回の3つの班では『居場所』という言葉がキーワードになりましたが、ここを『居場所』と思いたいのはスタッフのほうなのかもしれません。」

「子ども奉仕団」の最も大きな特徴として、「大人から子どもたちへ」サービスが提供されるものではなく、私たち大人もまた、「ほとけの子」であるという意識を持つことが挙げられる。「あなたも私もほとけの子」という認識の有無で、そののちの子どもたちとの関係性の持ち方に違いが現れる。

第1回の事前研修ではチーフを決める。班のチーフはその回の子ども奉仕団の方向性を大きく決める重要な役である。舵取り役といってもいい。趣旨文を決める過程で、班員の声を聴き、お互いの関係性を構築していくことが第1回事前研修の大きな目的の一つといっても過言ではないだろう。

### 3-2. 第2回スタッフ事前研修

第1回スタッフ事前研修でのテーマ・趣旨文を受け、各班それぞれの子ども奉仕団の方向性を決める。筆者はこの第2回スタッフ事前研修で2班と行動を共にした。2班のメンバーはベテランスタッフのほかに、宗門外からの初参加者が2名。20代～60代以上、男性がやや多く、女性が少ない。先に述べたように、2度目の事前研修では実際の企画・運営についての話を進めていく予定だったが、2班はまだ趣旨文が決まっていなかった。前回の事前研修での酒井氏の講義を受け、感じるところはあるのだが、なかなか言葉につながらない。そのような印象を受けた。しかし、そのような状況でも共通して出た言葉は「居場所」である。自分にとっての居場所とは何か、私の居場所とはどこなのか。「居場所」という漠然とした言葉に対して、それぞれが真剣に向き合うことで、少しずつ第2班の趣旨文の輪郭が見えてきたように思う。

2班のチーフHさんは、自らも子どものころに「子ども奉仕団」「中高生奉仕団」に参加し、「自分もスタッフとして参加したい」と、参加されるようになった経緯を持つ。Hさんは参加していたころの自分をこう語った。「『いい子でいなければいけない』という自分があった。だから『居場所』にこだわるのだと思う。」そのことを踏まえて何を参加する子ども達に伝えたいのか。座談の焦点はそこに移った。どんな人でも好んで嫌われないと思う人は少ない。「嫌われない」という思いが自分の在り方を変えざるを得ない。そうなる理由には、集団の中での自分の立ち位置を考えてしまうからに他ならない。しかし、「子ども奉仕団」は違っていた。自分の学校での日常を知る人がまばらで、尚且つ団体行動を強いているわけではない。「本当は来たくなかった。」ということ安心して言える場所が、この場所なのだ。その根拠になるのが「ほとけの子」、ご本尊の存在である。それが他のサードプレイスと大きく異なることである。

「子どもたちに伝えたいことがあるとするならば『こういう場所がある』ということ」と言ったスタッフEさんの言葉が象徴するように、「～でなければならない」という思いから解き放たれる場所が「子ども奉仕団」とするならば、「本当の自分は〇〇です。」と名乗れる場所を作ることが私たちの班のできることなのではないだろうか。そのような紆余曲折を経て、2班の趣旨文は完成した。

〈趣旨文〉

家での私は良い子です。

学校での私はちゃんとします。

〇〇での私は \_\_\_\_\_ です。

「でも、本当は、しんどいな」

自分が自分でいられる場所はどこかな

あっ！新しい自分の発見

ほとけの子は私です。

「ここに居ていいかな」

次節では2018年度第2回子ども奉仕団の詳細を述べる。

### 3-3.2018年度第2回子ども奉仕団（2018年7月29日～31日実施）

全2回の事前研修を受け、スタッフは開催日前日に集合する。第2班の集合は7月28日。

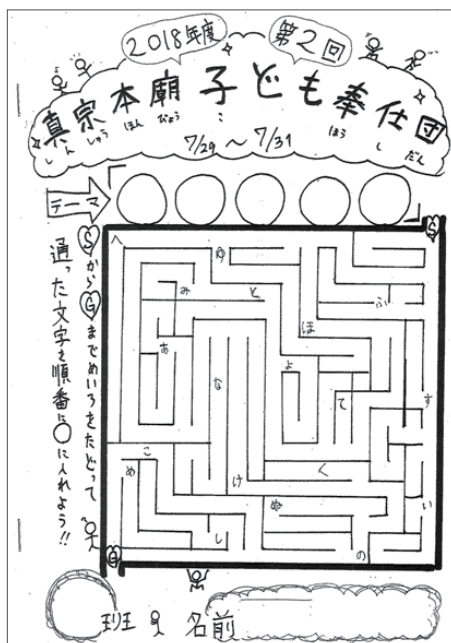


図1 2018年第2回真宗本廟子ども奉仕団 パンフレット

この時初めて自分がどの役割に着くのがわかる。役割は大きく分けて班担と進行のふたつ。一つの班につき班担は2人。男女で構成される場合が多いが、スタッフの男女比率によって変化する。進行は子ども奉仕団の全日程を進める役割を持ち、第2回子ども奉仕団では、全7班(うち

大人によって構成される引率班をひとつ含む)。参加者は団体での参加が6団体(子ども47人・引率6人・計53名)。個人参加が子ども11人・引率4人。子ども58人・引率10人の計68人での開催となった。班担は自分の班のメンバーを見て、食品アレルギーや注意事項を確認する。滞在中は班ごとに活動部屋があり、そこが活動の拠点となる。班担はそれぞれに活動部屋の飾りつけや班の目印になるプラカードなどを用意し、子どもたちを出迎える準備をする。

第1日目。到着した人から順にチーフから班の振り分けが発表される。自分の班がわかった子どもから順に班担と共に活動部屋に移動する。各班で名札の配布、貴重品・保険証の回収、体調の確認(持薬・食事・食品アレルギーの有無)、水筒の準備、日程説明、食事当番の確認を行い、配布するウエストポーチに念珠(数珠)、赤本くん勤行集(子ども向けのお経本)、パンフレットを入れて携帯するよう声掛けをする。全ての参加者が揃って、初めての集いが昼食である。子ども奉仕団では食堂で参加者全員が揃って食事をする。基本的な準備は食堂職員が行うが、みそ汁や米飯の配膳は食事当番の班が行う。食事の配膳、食前の言葉、食後の言葉、後片づけまでが食事当番の仕事である。

昼食が終わったら講堂にて生活指導として基本作法の確認を行った後、結成式を行った。式の流れは以下の通りである。

[式次第]

ちかい／真宗宗歌／勤行(同朋奉讃)／研修部挨拶／恩徳讃／生活上の連絡・お願い  
講師・スタッフ紹介(チーフより)

ちかいの言葉は仏教徒としての名乗りである「三誓偈」(さんせいげ)を、こどもにもわかる言葉で置き換えたものである。

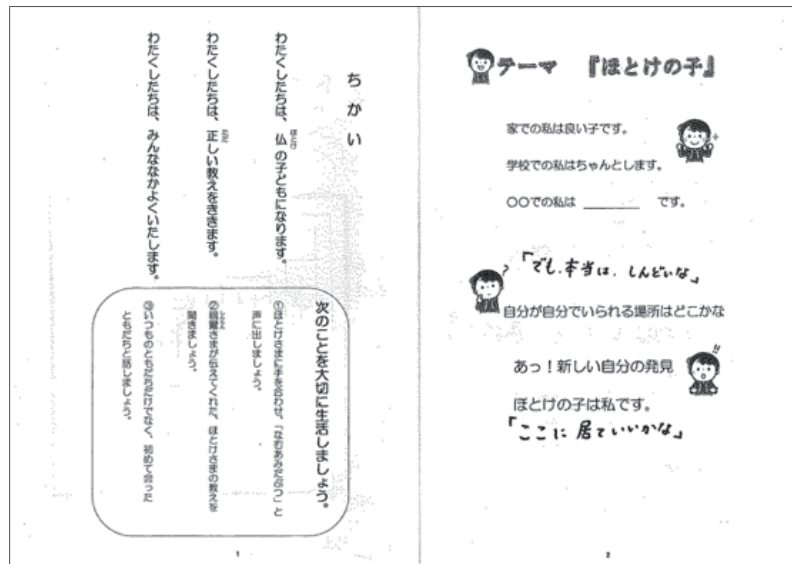


図2 式次第で使われる「ちかい」

スタッフの紹介終了後、参加者全員でアイスブレイクを行う。他己紹介ゲームを用いることで緊張した面持ちの子どもたちの表情は少しずつ緩んでくる。

第2日目。劇とレクとお話が中心に日程が進む。今回の趣旨文を元に、全2回の劇が行われた。





図3 劇とレクリエーションの様子

元になった話は「泣いた赤鬼」。人間と友達になりたい赤鬼が、友達の青鬼をやっつけることで、人間からの信頼を得て友達になるも、青鬼は自分から離れて行ってしまったという日本昔話である。第1部はこのよく知られている物語を、スタッフが全力で演じ切り、その後役者がゲームに登場する。設けられたゲームをひとつクリアするごとに、パズルのピースが手渡され、すべての班がその手渡されたピースを当てはめると、「アミダパワー!」と書かれた一枚の絵になるというレクリエーションである。劇はそのアミダパワーによって復活する鬼の話へとつながっていき、第2部が始まった。

第2部は視点が赤鬼から青鬼へと変わる。鬼ヶ島へ帰った青鬼は、家族のために人間を狩る緑鬼や人間が怖いけど人間しか食べられない黄鬼と出会い、自分が赤鬼にしたことを振り返る。ここへ、真宗大谷派のキャラクターであるらんおんくんが登場し、念仏と問いかけを残し立ち去って、幕は降りた。勧善懲悪でもなく、誰もが頷くようなまとめをせず、「問いかけ」を残すこの劇で、子ども達は何を感じうるのだろうか。

これらの劇を観劇したのち、講師はよりかみ砕いた言葉で、子ども達に「おはなし」をする。全4回のおはなしの中で、特に印象的だったのは、結成式の時に行った「ちかい」についての言葉である。「ちかい」には、「みんななかよくいたします」とある。その言葉は「嫌いな人を好きになる」という意味ではない。「同じ場所に一緒にいる」という事実が大切なのだという言葉である。

夜は普段はなかなか入ることのできない、東本願寺の施設を使い、ナイトウォークを行った。

第3日目。最終日は、講師によるおはなしののちに感想文を書いたり、フリータイムを過ごす。感想文をいくつか見せてもらると、「楽しかった」「また来たい」という言葉が多く書かれていた。子ども達へのインタビューでも同じような回答がほとんどだったのだが、今年も来ようと思ったきっかけに「去年であったスタッフにもう一度会いたかったから」という声があった。ここでしか出会えない人がいることで、「もう一度来たい」という気持ちを呼び起こされるということは、よほどそのスタッフとの出会いが衝撃だったのだろう。普段の生活の中では出会えない人に出会える場所。それが東本願寺であり、同朋会館という施設なのだと感じた。11時半に解散式を行い、昼食のち班ごとに片づけし子ども達の退館を見送った。スタッフの声に関しては次節で詳細を述べる。

## 4.「場を作る」と「場の力」

### 4-1.参加者・スタッフの声

子ども奉仕団終了後のスタッフ反省会では、様々な意見や感想が出る。2度の事前研修は、主役である子どもの不在から実際に子どもたちとの触れ合いがあるので、自分の中にある子ども像を崩されるせいか、大人同士のこざかしいやりとりが意味をなさなくなる瞬間、どうしていいかわからなくなる瞬間が必ずある。

子ども達とのやり取りから気づかされることもあれば、スタッフ同士の齟齬が反省の弁に挙げられることもあった。大人であるスタッフもまた「みんななかよくいたします」の難しさを、子どもと共に実感する。これらの繰り返しを行えることが、「同朋会館をつくる」ということなのである。

### 4-2.考察

「場の力」。これは真宗大谷派でよく聞かれる言葉のひとつである。「場の信頼」という言葉で表されることもある。長年参加しているスタッフの声でも「ここでなら自分の言葉を話すことができる」、「ここなら私は私でいられる」など、自分の振る舞いや言動に対するリミッターが外れるように感じているようだ。

私たちは普段の日常生活で、どれだけ本音で人と会話しているだろうか。場当たりの、その場しのぎで周りの様子を見ながら言葉を選んではいないだろうか。それは人の間を生きる上である程度は必要な技術なのかもしれない。

同朋会館という施設の役割は「問う」ということに他ならない。繰り返しになるが、本廟奉仕とはそれ自体が問いを持つということである。「我が身を問うてゆく」「我が身に聞いていく」「我が身をたずねる」。それができる場所が同朋会館という場所なのである。子どもたちは、自分の感情を適切に表現できる言葉をまだ知らずにいる。そんな彼らから発せられる言葉は、より原始的な「心からの声」ではないだろうか。子ども達より多くの言葉を持つ我々大人は、その多様な言葉を持つがゆえに、「本当の気持ち」をうまく隠してしまえる。そんな子どもと大人が対等に関わることで、参加者である子ども、スタッフは新しい自分に出会っていくことができる。

## 5.今後の課題として

スタッフとして参加することで、ただ歴史的な建物を観光するのではなく、その建物が今日までここに存在したのはなぜなのか。その理由の一端を知ることができる。物事を知ることや学ぶことには時間がかかる。ましてや自分一人で学びを継続していくことは難しい。

長年スタッフとして参加しているKさんは言う。「私もわからないので、子ども達と一緒に考えたいと思います。」その言葉は子ども奉仕団の在り方をとてもよく表している。

企画運営には様々な創造性が求められる。演劇や小道具、部屋の飾りつけ、何よりも人との関係性を創造する力。そしてそれらの力を持つ人を、子ども奉仕団は強く求めている。これまで歴史の教科書でしか仏教に触れてこなかった人や、何も知らない人が、この集団にはむしろ必要なのではないかと感じた。どんな集団にも言えることだと思うのだが、その中での認識が固定化してしまうと、どんな立派な教えも形骸化してしまう危険をはらむ。様々なフィールドの一つとしてお

寺がある。初めはそういった意識で構わない。しかし、そのような多様さがより豊かな関係性を育むものであると信じている。そうすることで、本来寺の持っていた役割に立ち戻れると信じ、これからも宗門に関係する児童教化に関する取り組みをより丁寧に紐解いていきたいと思う。

## 注

- 1)「こども検診医療基金・関西」 <http://kodomokenshin.com/index.html>
- 2)「しんらん交流館」 <http://jodo-shinshu.info/access/>
- 3)「東本願寺」 <http://www.higashihonganji.or.jp/>

## 参考文献

Rey Oldenburg 1989 THE GREAT GOOD PLACE Café,Coffee Shops,Bookstores,Bars,Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of Community  
(=忠平美幸訳 2013『サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地の良い場所」』みすず書房)

上田紀行 1995『宗教クライシス』岩波書店

上野千鶴子 2002『家族を入れるハコ家族を超えるハコ』

真宗大谷派青少幼年センター

2011『青少幼年教化指針 第1部 ―青少幼年教化の歩みと展望―』

池田勇諦 2007『いのちとひかり―真宗のいのち観』

東本願寺 1986『教団のあゆみ 真宗大谷派教団史』